

## ■（８９）ロンドン五輪取材のライバルは「時差」

ロンドン五輪の開会式まで２週間に迫った。新聞やテレビの取材チームも最後の準備に追われている。「五輪好き」と言われる日本。各社とも記者やカメラマンだけでなく、記事や写真を現地から速やかに発信するための技術者やロジ担をも含む大規模なチームを送り込む。

新聞製作にとって最大のライバルは時差。人気競技の決勝は現地のゴールデンタイムに設定されることが多い。となると、日本時間は翌未明か早朝だ。朝刊の締め切り時刻は過ぎているので、「メダル」の報道は、午後に読者に届く夕刊となる。その夕刊を発行していない地域では、次の日の朝刊になる。一方、テレビは当然、決勝直後の朝のニュースや情報番組で「速報」するだろう。新聞社もネットの新聞や号外で補う方法はあるものの、やはり逆転の発想しかない。全国の新聞社に記事を送る通信社もすでに、朝刊は選手の間人ドラマなどが中心になる、と編集方針を示している。新聞記者の取材力や企画力が問われる祭典になりそうだ。

自ら現地入りした４年前の北京五輪。時差は１時間で、「本社」が寝ている未明・早朝に取材・出稿という時間のズレはなかった。ロンドンに比べれば、体に優しい五輪だった。（山）